Akademie der Wissenschaften の Friedrichstag に於けるランケに對する追悼講演の再錄)。

もとより、本書は、歷史主義の成立を歷史的に叙述したに止まる。從つて、十九世紀に於ける歷史主義の開花——更に今世紀大戰後に於けるその破綻の叙述を本書に求めるのは無意味である。しかし、成立の問題が同時に本質の問題でありうる場合が少くない。そして、歷史主義もまた、かゝる場合の一つであるやうに思はれる。歷史主義の破綻が、かへつて人を歷史の問題に強く惹きつけてゐる現代に於いて、類書の少い本書の如きは、少くとも退化せる歷史主義の克服と新しい歷史意識の誕生に關心を有つ人々にとつて、必讀の書の一つであることを信じて疑はない。(Friedrich Meinecke; Die Entstehung des Historismus. 2 Bde. S. 656 München und Berlin, 1936. Verlag von R. Oldenbourg) (邦貨約貳拾圓) (中山)

彙報

○京都帝國大學文學部史學科

昭和十二年度卒業論文題目

國史專攻 (二十名)

戰國時代の本願寺とその教團の統制組織　天野　義靜

堀川學派の思想史的考察　鵜井　伸明

平安朝末期に於ける貴族の生活意識　木越　宏

室町社會と庶民の精神傾向　白濱　大次

德川時代の農村と農民の生活　鈴木　光次

中世商工階級の一考察　高谷　重夫

近世初頭の民政　土井　彬

幕末に於ける讃岐高松藩の制唐業　永田　蕃

中世初期武士集團の思想特に集團意識としての個人意識の伸展　錦織　透

農民生活の歷史的展開　平山敏次郎

平安末期の社會相　平山　久

中世末期に於ける商業　深谷芳太郎

幕末薩藩の諸事情　藤谷　俊雄

維新志士の處世觀 (義擧に關係せる志士を中心として)　松岡　健一

鎌倉武士に於ける信仰の一考察　松村　功

近世社會と庶民の教育　松山　國義

大阪川口新田の研究——德川時代に於ける町人請負新田の本質に就いて——　前橋　正二

中世後期に於ける教育の時代的變遷　宮崎　克己

鎌倉時代國民文化の基礎事實　村山　修一

國學に於ける復古的傾向　山口平八郎

東洋史專攻 (六名)

後魏初に於ける漢族に就いて (特に鮮漢關係)　岡田芳三郎

佛教移入と漢末社會の諸事象　岡村道三郎

宋代私塾の展開　大谷榮之助
宋朝と南海貿易　木田道太郎
唐中葉以後の商業問題　古賀　義勝
清朝入關前の俘獲と降民　塚本　主税

西洋史專攻（六名）

二月革命に於ける國民工場の問題　石澤　慶一
獨乙農民戰爭の原因探究と歎願書によるその助成　小澤　吉見
英國清教主義の一考察
——（オリヴァ・クロムウエルを中心として）　川野　政三
宗教改革前に於ける獨乙人文主義者の努力　高山　保則
ランケの革命觀　詫　又男
ピアズ・プラウマンの社會史的研究　松浦　道一

地理學專攻（四名）

高距一千米以上に於ける日本アルプス地方の聚落に就いて　衣川芳太郎
エラトステネスの地理學　杉村正治郎
高知平野の地理的研究——特に人口を中心として——　中江　健
生駒山脈西麓に於ける水車の地理學的研究　和田　俊二

考古學專攻（一名）

希臘世界の成立に就いて——多島海文明の一考察——　角田　文衛

○史學研究會

第二十二卷　第二號　四二八

例會　昭和十二年一月三十日（土曜）午後一時半より文學部史學科第一教室に於いて左の二講演あり、四時半頃閉會。

一、アウグスツスの地位に就いて　井上　智勇氏

近世ローマ史研究に於いては、アウグスツスの政治はプリンチパアトの名を以て呼ばれ、ディオクレティアヌスの專制政治とは區別されるのが普通である。アウグスツスの地位を知ることは、初期ローマ帝政の特質を理解することに他ならない。然らば從來のローマ史研究者は、之を如何に考へて來たか。

先づ第一に、アウグスツスの統治を以て共和政の復活なりとする見解がある。これは、すでに古くローマ時代の歴史家に於いて見られる説であり、近時に於いてもフェレロ、クロマィヤァ等によつて代表されるものである。併し、アウグスツスの地位は、單に共和政の純然たる延長として考へ得るであらうか。彼等は、共和政時代の諸制度がアウグスツスによつて維持されたことを強調する。が、然しかゝる諸制度は、そのもの本來の意味を尙有してゐたであらうか。吾々は、右の見解に對しては、アウグスツスの有せる軍隊統率權及び護民官としての彼の地位が、共和政時代のそれとは、本質的にその性質を異にすることを指摘せねばならないであらう。

第二に、初期ローマ帝政をば、皇帝と元老院との二元政治として特質づける立場がある。これは、モムセン、マィヤァ等によつて代表される説である。だが、レオン・オモも主張する如く、アウグスツス時代に於いては、元老院の自主性は、もはや疑はしいものであり、加ふるに紀元前二八年その他數度の元老院改革に

よつて、尙、元老院議員としての地位を保ち得た者は、タキツスも云ふ如く、單にアウグスツスの個人的支配を承認するもののみであつた。斯くて、アウグスツスと元老院との關係は、並立のそれではなくして、上下のそれであつたと云はれねばならないであらう。

以上の二說は、何れも法理論を根柢とする近世史學者の說であり、それが法理論を基礎とする限り何れも誤つた考察である。何故なら、アウグスツスの princeps civium としての地位は法によつて規定されたものではないからである。然らば、彼の地位の根柢は何であるか。それは――彼自らが云つてゐる如く――權威（アウクトリタス）である。これは、全市民の自由意志に基くものであり、なんら法的命令に據るものではない。官職に附隨するポテスタスは固定的恒常的なものである。之に對して權威は直接に人に附隨する。從つて、それは人と共にあり、人と共に消滅する。アウクトリタスなる觀念は、共和的傳統となんら矛盾するものではない。それは公法的概念ではなくして、私的・習俗的な觀念であり、從つて彼の地位は、公法によつて規定された最高の支配者と云ふが如きものではなく、單に權威にもとづく「人民の指導者」と云ふ程のものに他ならない。

尤も、共和政時代の權威が、人に具はり、他人によつて唱へられるのに對し、アウグスツスのそれが、彼自らによつて主張されると云ふ點に於いて、差違が認められ、從つて主客の關係が轉倒された點に於いて、一つの新しい關係の醸成が考へられる。云はゞ、前者は下からの權威であり、後者は之に對して上からの權威とでも云はれ得やう。だが、それ故に、直ちに彼と市民との關係が力の關係だとは云へない。成程、上からの權威と云へばディグニタスなる概念と共に、もはや共和的概念を越えた新しい性質を含むものではあるが、然しそれの根柢には、尙下からの權威と云ふものが存在した。こゝにアウグスツスと、マイヤァによつて同一地位にありとされる、ポンペイウスとの相違がある。

アウグスツスのプリンケツプス政治は、キケロの思想の實現と云はれる。それは、どのやうな意味であらうか。こゝに於いて、吾々はギリシア古典哲學、特にその國家論とキケロの思想との關聯を理解しなければならぬ。殊に、ギリシアにその起源を有つ「哲人政治」の理想が、キケロの思想の中にその場所を見出してゐた事を知られねばならない。斯くして、アウグスツスのプリンケツプス政治は、ローマ政治史の飛躍であると同時に、他面に於いては、キケロによつて代表される當時のギリシア風思想をその思想的背景として有つものであつた。

アウグスツスは、神格化せられ、ジュピタァと同列に置かれた。それは元老院・ローマ市民・屬州民の Abstufung を固持する Gemeindestaat ローマを Reichsstaat 或は Weltstaat たらしめる契機であつた。アポテオーシスの思想は、古來ローマ人のものではない。それは、ギリシア人の Heroen-Kultus 乃至はオリエント風の Herrscher-Kultus とのつながりに於いて考へられるものである。

要するに、アウグスツスの地位は、單に後世の法理論を以て解釋されうるものではない。それは、ギリシア思想や、オリエント

思想、要するに全ヘレニズム文化世界の中に於いてのみ考へうべき一つの新しい Alleinherrschaft の形式であつた。云はゞそれは Dualismus der römisch-hellenistischen Kultur の政治的表現に他ならないであらう。（文責、中山）

一、神道の基本的性格　　柴田　實氏

（本誌掲載の豫定につき梗概を省略）

○讀　史　會

例會　一月二十九日午後五時半より、樂友會館小食堂に於て、本年度卒業生、宮崎、龜井、土井、綿織、平山（敏）、松岡、六君の卒業論文の發表があり、別に魚澄講師の、神社鎭座地と聚落に關する講話があつた。

例會　二月六日午後一時より、前回に引續いて本年度卒業論文發表會を、第一教室に開き、藤谷、平山（久）、高谷、村山、松山五君の梗概發表があつた。

尙、右終了後、卒業生殯餞會を午後六時より三條寺町、三島亭に於て開催し、出席者、西田、中村、牧野、出雲路、柴田各教官以下先輩學生を合せて四十餘名の盛會であつた。

○民　俗　學　會

公開講演　二月十九日午後三時陳列館第一教室に於て、恰も西下せられたる柳田國男氏を迎へて公開講演會を催す。來聽者約七十名、講演要旨左の如し。

盆と行器（ほかひ）　　柳田　國男氏

ほかひは行器と書き普通外居の義とせられてゐる食物を盛る器のことであるが、本來祭を意味するほかふといふ動詞の名詞形なるべきことは、ほかひめし（飯）、ほかひじやうりやう（精靈）等今も諸方に行はれる方言に徵して明かである。即ち、もと食物を盛つて精靈に供することがほかひであつたのが、後次第に轉じてその食物を盛るべき器物の名となつたものと考へられる。このことより推して、七月十五日の祖靈の祭祀を盆と稱することも、もと〳〵食物を盛るべき器物の名より轉じたのではないであらうか。古く續記などに送瓮とある瓮は即ち盆のことでなければならぬ。少くとも之を盂蘭盆なる梵語の上略とし、その行事を盂蘭盆經の所說によつて起るものと說くは著しく不合理である。同じやうに佛をほとけと稱することももとほとぎ（缶）より出でたものと解する方が少くとも之を浮圖氏の轉訛と見るよりは自然であらう。（以上）

尙、同夜六時より樂友會館に於て座談會を開き、山上氏の國樣舞に就ての談話の外、種々の民俗に關する談話を交へた。

○支　那　學　會

例會　二月六日（土）午後一時、文學部第一演習室。

人境廬詩草を讀む　　鈴木　虎雄氏

豫餞講演會　三月七日（日）午後一時、樂友會館。出席者三十一名。

晉義相關論に就いて　　田中　謙二氏

孔子の人生觀に就いて　　西村　倪二氏

尙講演終了後、五時半より同會館食堂にて晩餐會を催す。
出席者十九名。

○東洋史談話會

卒業論文發表會　二月十五日(月)午後七時、學生集會所

○東方文化學院京都研究所

講演會　一月三十日午後二時於同所講演室。
高句麗の壁畫に就いて　濱田　耕作氏

○西洋史讀書會

例會　昭和十一年度第四回例會を十二月十七日(木)午後六時より樂友會館にて開催、左記二君の讀書紹介あり九時半頃散會。
出席者　時野谷、原兩教授、井上講師を始め十六名。
一、H. v. Treitschke; Schleswig-Holstein Erhebung　二回生　高世日出男君
一、Fustel de Coulanges; Le Colonat Romain　二回生　鹽月　倫君

例會　昭和十一年度第五回例會を十二年一月二十八日(木)樂友會館にて開催、左の研究發表あり九時半頃散會、出席者　時野谷原兩教授、井上講師を始め、十九名
一、アンリ・セー・(H. Sée)、人と學說批判　前川貞次郎君
中山　治一君

アンリ・セー(一八六四—一九三六)の生涯並にその著述に就いて述べ(本誌二十一卷三號參照)、特に彼の歷史に對する態度、方法、目的などが、フェステル・ド・クーランジュに負ふ所多きを注意し次で彼の歷史理論の中その歷史科學論及び比較方法論を紹介。セーによれば自然科學とは異なり事物の數學的關係＝法則を樹立し得ざる歷史學に、そして、特殊的、偶發的なものが強く作用する諸現象を對象とする歷史學に科學性を附與するものは何か？といふに、それは所謂一般的恒久的現象——具體的には政治的經濟的社會的諸制度——の叙述ではなくして說明にある。卽ち、歷史は記述的たることを止めて說明的になることによつて科學に迄高まるのであり、この場合に最も必要にして缺くべからざるものが比較方法なのであると云ふ。かくセーの歷史理論に於いては比較方法は極めて重要な意味を持つものであり、然も之は社會經濟史の領域に最もよく妥當するものと考へられる。そしてその比較の仕方には場所的同時代的比較と異なる時期の比較の二つがあり、前者の典型的實例として彼の著「Esquisse d'une histoire du régime agraire en Europe aux XVIIIe et XIXe siècles. (1920)」が擧げられる。

彼は此の著に於いて先づ近世ヨーロッパ諸地方の農業制度をば一、フランス型 régime seigneurial 二、プロシア型 régime de la sujétion、三、ロシア型 régime de la servitude personnelle の三種に分類し、然もこの夫々の中間には二つの型の性質を兼ね具へる多くの中間的形態が地域的に漸進的に配列されてゐることを强調し、次いで第十八、九世紀に於ける農奴解放がこの夫々の型に特有な形式に於いて遂行されたことを述べてゐるのであるが、しか

し此處に示された彼の所謂比較方法 methode comparée は例へば生物學に於ける分類學と極めて近い關係に於いて考へられるものであり、彼の所謂類型 type も文化科學的概念であるよりもむしろ自然科學的概念――例へば動植物學に於ける類や、種の概念からの借物に外ならない。然も彼がかゝる type を抽出する仕方は、自然科學に於ける歸納法と等しい。このことは例へば Max Weber の主張する方法論的概念 Idealtypus との比較によつて、最もよく特徴づけられる。

要するにセーはその歴史理論に於いて、歴史學を先づ法則性の否定によつて自然科學と峻別することより出發しつゝ然も尙歴史の科學性を自然科學のそれとの類同性に於いて、いはば飽くまで數學的・物理的合理に基いて求めんとしたこと及びかゝる科學としての歴史が特に社會經濟史であると考へる時、彼は尙未だ自然科學の影響より脱却して居ず、その限り彼の歴史家としての限界は狹い意味での優れた社會經濟史家に止まると考へられる。

このセーの歴史理論、特に比較方法論に對して、セーが主張する如くこの比較方法は歴史研究の本質をなし、重大なる意味を持つものではなく、かゝる方法は強め、比較さるべき對象が明かにせられてゐなければならず、その限りこの方法は單なる一つの手續きにすぎず、このことはこの方法が比較的重要視せられる民族學、神話學に於いても同樣である云々の批判が加へられた。

〔前川、中山〕

卒業生送別懇談會　昭和十二年二月二日午後五時より祇園石段下鳥岩樓にて開催、時野谷、原兩教授、井上講師を始め、十八名出席、和氣靄々裡に十時前散會。

○地理學談話會

前號報告以後地理學教室に行はれたる談話會は次の如し。

昭和十二年第一回談話會（一月十六日、於地理學實習室）

一、杉村正治郎君（三回生）地理學論の諸要件
一、木村　憲治君　京城の成立と風水說
一、菊田　太郎氏　再びチューネンの孤立國に就き

第二回談話會（一月二十九日、於地理學實習室）

一、中江　健君（三回生）高知平野の地理學的考察
一、和田　俊二君（三回生）生駒山脈西麓に於ける水車の地理學的研究
一、小野　講師　アメリカのパイロット・チヤートに就き

第三回談話會（二月十日、於地理學實習室）

一、衣川芳太郎君（三回生）日本アルプスの聚落
一、伊藤　博君（二回生）水鄕と江間
一、田中　講師　地理學所感

以上三回生諸君は卒業論文の報告であつた。菊田氏はチューネンの所說の解說を以て地理學研究者の反省を促され小野講師はパイロット・チヤートの實物多數を傍にしてその解說を行はる。田中講師の述べられしは地理學の純粹性に關する偶感。〔野間〕

○考古學綜合談話會

昭和十一年度我々は五月二十六日（火）、考古學實習室に於いて「考古學上の諸問題を語る」なる演題で、濱田、清野兩教授、梅原小牧兩助教授、末永雅雄氏等及び教室員學生四十名近く集つて、久し振りの談話會を開催し盛會であつたが、二學期も終る十二月十五日（火）午後三時より、綜合談話會なる名稱のもとに約三時間半、史學科第一教室にて左記の講演（各人、二十分）を開催した。會する者、醫學部人類學關係の人、史學科地理、歴史等の人々或は東方文化の人々も加はり教室員を加へて約六十名。濱田教授は滿面喜悦の姿で「今後かゝる會合を一學期に一度催したい」と結ばれた。先づ角田文衛氏は「日本繩紋末期の文化」と題して、主としてその終末實年代に觸れられ、喜田講師及び山内清男氏の說を紹介され自己の研究を以てこれらを批判せられた。主として東北地方鱒ヶ岡式に就いて、その折衷說を主張された。今井富士雄氏は「樣式論の再吟味」と題して、洛西龍安寺の庭石を、先學の樣式論からあてはめて吟味された。中村清兄氏は「高句麗古墳の星象壁畫」と題して、發表された。その力作は考古學論叢第四輯に掲載されてゐるから愛讀されん事を。次ぎに小林行雄氏は「彌生式文化の起源」と題して、主として土器に觸れられその祖源を今の所直接朝鮮等に求められない事を述べられ、石器に就いては然らざる事を紹介された。鑄方貞亮氏は「日本古代の家畜」と題して主として馬牛犬等に就いて、考古學的遺物のみを以つて、今迄の出土例を以つてしては積極的に家畜の存在を證明しにくい事を述べられた。更に三森定男氏は「所謂編年學派と私の立場」と題して、近頃の關東に於ける繩紋土器編年が東大理學部人類學教室出身の人々に依つてなされてゐるのを、その編年が機械的編年であつてはならない事、換言せば生産現象を考慮に入れた文化史的遺物の歴史的編年であらねばならぬ事を强調された。能勢丑三氏は「平安朝の石層建築」と題して近頃氏が研究されてゐる山崎寶寺附近の石層建築、就中鶴の塔に就いて發表されんとしたが時間來り退場された。次ぎに小牧助教授は「近江佐目の石灰洞」と題して、先生が研究されてゐる近江カルストの村々の一つ佐目發見の多數の獸骨及び後期繩紋土器片の發掘物を紹介、標本を供覽された。同じく三宅宗悦講師は「南島德ノ島喜念出土の貝製品に就いて」と題して、氏の近頃研究されてゐる南島文化の一端を示された。同じく標本供覽。最後に濱田教授は熱河赤峯紅山出土の土器及び後日教室に寄贈された完形彩文土器（考古學雜誌昭和十二年二月號參照）に就いて標本供覽說明された。「光は東からではなく西から」と得意に論ぜられた。以上の如くである。我々は濱田教授の言はれた樣に今後一學期に一度はこの談話會を意義あらしめたいものだと、ひそかに誓ふものである。なほ以上要約の積りであるが、もしかして講演者諸先輩の話の內容を聽き間違へてゐたら惡しからずお許し下さい。〔藤岡〕

會報

○會員移動

○入會

京都市中京區荻屋町姉小路下ル　柳山　淳氏
愛知縣幡豆郡幡豆町　中村　汎氏
（右二氏野上俊靜氏紹介）
京都市左京區北白川上終町七二　田中市太郎方　小林　尊志氏
（右柴田實氏紹介）
京城府朝鮮總督府圖書館內　小倉　親雄氏
（右前川貞次郎氏紹介）

○轉居

京都市左京區下鴨芝本町五三　中野方　平山敏治郎氏
京都市左京區下鴨北園町一三〇　吉原　好人氏

○退會

富田　玄彌氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄

横井春野著　能樂全史（改訂版）上卷	東京わんや書店著	
片岡彌吉著　高山右近大夫長房傳	著者	
稻葉君山著　釋標	著者	
大類伸著　日本城郭史	大類　伸氏	
鳥羽正雄著　新撰北海道史　第一、五、六卷	（北海道廳）北海道史編纂掛著者	
神尾式春著　契丹佛教文化史考	京城帝大法文學部	
京城帝大創立十周年記念論文集　史學篇	同　右	
船田享二著　羅馬元首政の起源と本質	東京堂	
西村眞次著　日本文化史點描	東洋文庫	
池內　宏著　文祿慶長の役　別篇第一	齋藤斐章氏	
齋藤先生古稀祝賀記念論文集	第二早高史學研究會	
和文西洋史圖書目錄	東大史學會	
史學雜誌　四十八ノ一、二、三	日本歷史地理學會	
歷史地理　六十九ノ一、二、三	社會經濟史學會	
社會經濟史學　六ノ九、十、十一	大塚史學會	
史潮　七ノ一	東京人類學會	
人類學雜誌　五十一ノ十二、五十二ノ一、二、三	東北帝大文科會	
考古學雜誌　二十六ノ十二、二十七ノ一、二、三	考古學會	
文化　三ノ十二、四ノ一、二、三	國學院大學	
國學院雜誌　四十三ノ一、二、三	史迹・美術同攷會	
史迹と美術　八ノ一、二、三	京大經濟學會	
經濟論叢　四十四ノ一、二、三	社會學徒社	
社會學徒　十一ノ一、二、三	三田史學會	
史學　十五ノ四	鵤故仰舍	
夢殿　十四（四天王の研究）	臺大短歌會	
臺大文學　一ノ六、二ノ一	青丘學會	
青丘學叢　二十五		

國民精神文化　二ノ三
史　觀　十
宗學研究　十三
民族學研究　三ノ一
西洋史研究　十
皇　學　四ノ四
日本文化　九
東洋史研究　二ノ二、三
歷史學研究　七ノ一、二、三
京城帝大史學會誌　十
哲學研究　二十一ノ十二、二十二ノ一、二、三
中國文學月報　二十一——二十四
善隣協會調査月報　五六、五七、五八
東方學報　東京第六册別册、第七册
商業と經濟　十七ノ二
國　史　學　二十九
畫　說　一
ふ　び　と　四
立正史學　八
長崎談叢　十九
防長文化　一ノ一
鄉土史壇　三ノ三
史學消息　一ノ四
通報（T'oung Pao）　三十二ノ五

國民精神文化研究所
早大文學部
宗學研究會
日本民族學會
東北大西洋史研究會
神宮皇學館々友會
天理圖書館
京大東洋史研究會
歷史學研究會
京城帝大史學會
京都哲學會
善隣協會
東方文化東京研究所
長崎高商研究館
國學院大學史學會
東京美術研究所
第二早高史學研究會
立正大學史學會
長崎史談會
防長史談會
岐阜一信社
燕京大學歷史學系
ペリオ氏

北平圖書館
國立北平圖書館々報　十ノ四、五、六
Nankai Social & Econonic Qrauterly　九ノ四
南海大學經濟研究所
Harvard Journal of Asiatic Studies　一ノ三、四
Harvard-Yenching Institute

訂　正

前號別紙會計報告中
差引殘高　七三〇・三七円　を　七三〇・三四円に訂正